

## コミュニケーションの成立過程における大人の役割

——乳児—母親および障害児—関与者のあいだにみられる  
原初的コミュニケーション関係の構造——

鯨 岡 峻\*

Takashi KUJIRAOKA

The Role of the Adult in Establishing Communicative Relationship with a Child.  
—— the structure of the primordial communicative relationship  
between infant and mother, or handicapped child and participant ——

### はじめに

本稿は、文部省科学研究費補助金重点領域研究の一環として昭和63年度より筆者を中心に進められている研究「コミュニケーション障害の構造と指導」\*\*に関連して、その骨組みとなるコミュニケーションの成立過程について、理論的な考察を巡らすものである。

考察のベースとなるのは、重点領域研究としてこれまでに行なわれた乳児院における乳児—保母の事例追跡的観察研究、および現在進行中の一般家庭の健常乳児—母親（二例）の事例追跡的観察研究、さらには「ことばの教室」や養護学校における障害児—母親—担当者の指導場面の観察研究である。方法は、「関与しながらの」観察、およびビデオ録取、また担当者および母親の内省聴取である。過去2カ年の研究成果の一部は、各年度における研究成果発表会の発表論文集に報告されている（鯨岡，1989a；1990）。本稿は、その平成元年度の発表論文集に報告した原初的コミュニケーション・モデルの、その構成の経緯を解説する目的を持つとともに、それとは別の文脈でこれまで取り組んできた初期母子関係研究（鯨岡，1986b；1989cなど）の延長線上に位置付けられるものである。

\*\*\*

乳児と母親のあいだにおいてであれ、障害児と関与者

のあいだにおいてであれ、二者間にコミュニケーションが成り立っていく過程の、その端緒となる関係のあり様を明らかにしようというとき、私たちはどこから出発すべきだろうか。

日本でコミュニケーションというとき、その語の意味は一般的には「ある観念を伝えること」「ある観念を交換すること」というふうには、「観念を伝え合うこと」に力点が置かれたかたちで理解されている。このような理解の上に立てば、コミュニケーションの成り立ちということも、その観念がどのように分節されるようになるか、分節された観念がどのように記号によって表現され伝達されるようになるかという具合に、要するに個体の能力発達という文脈の中で、個体の記号伝達過程と記号解読過程の発端を記述することだということになる（図1参照）。従って、コミュニケーション障害の文脈においてコミュニケーションの成り立ちを考える場合も、障害児がどのようにしてコミュニケーションの行動を形成・獲得していくかという、その個体内機能の改善・向上の議論に傾斜していくことになるだろう。

しかしながら、二者のあいだに生じる出来事としてのコミュニケーションを、最初からそのように個体の記号伝達・解読の過程に還元し、その相互作用というふうには理解してしまってよいものだろうか。本来コミュニケーションといわれているものには、観念の伝え合いという

\* 島根大学教育学部教育心理学研究室

\*\* 本研究の一部は、平成元年度文部省科学研究費補助金重点領域研究「コミュニケーション障害の構造と指導」（課題番号01626007：研究代表者 鯨岡 峻）に拠っている。

意味ばかりでなく、広い意味での「働き掛け→応答」の構造があって、そこにおいて情感が通じる、情感を共有するという面を伴っているはずではなかったか。

とりわけ、いまだコミュニケーションとは言い難いもののなかに後に完成されたコミュニケーションの根を探ろうという発達論的な試みにとって、コミュニケーションを最初から分離独立した二個体間の相互的な記号伝達・解読の過程に環元し、そこから出発することには疑義がある。なぜなら、第一に、私たちはむしろ、伝えられる内容、あるいは伝える一伝えられるということさえも、いまだ曖昧で未分節であるような事態の中に、コミュニケーションの根を探っていかなければならないと考えるからであり、第二に、そこではむしろ記号伝達・解読的側面よりも、働き掛け→応答の構造に随伴する情動通底的、情動共有的側面にウエイトがあると思われるからである。

ここで、乳児と母親、障害児と関与者のような二者の生活関係の中で、コミュニケーションが成り立たないと大人の側に受け止められる事態を考えてみよう。つまり生れて間もない乳児に対して「きょうはいいお天気ですよ、お散歩に行きましょうか」と母親が話しかけて「対話」を試みる場面や、自閉症児に対して「○○ちゃん、これ面白いから一緒にしてみようよ」と関与者が話しかけるような場面で、乳児からも自閉症児からも何ら応答らしきものが得られないような事態である。そのときの大人の意識に即して言えば、「成り立たない」というのは記号の伝達・解読の水準でうまくいかないということではなく、むしろ、そこに「働き掛け→応答」の構造が見出されないために、「こちらの気持ちに通じない」「こちらに通じてくるものがない」「子どもの気持ちが掴めない」「どうしていいかわからない」というように、二者間の情動交流の水準で「あいだに通じない」というネガティブな感じを持ってしまうことである。つまり、働き掛け→応答はまずもって情動交流の水準で受け止められ、そこで通じ合えることが当面目指されているといえるだろう。

事態をそのように受け止めてしまうということは、関与する大人自身が、働き掛けがあれば応じるという、いわば「通じ合う世界」に生きていることを暗黙の内に前提し、その前提が目の前の子どもの関係の中でも当然に満たされるべきと暗に想定していることを物語っている。しかしながら、障害児と関与者のあいだではもとより、乳児と母親のあいだでさえ、二者はそこに共在すれば直ちに通じ合えるというような、最初から融合した「幸せな」関係にあるわけではない。だからといって、両者

は単に授乳や世話という道具的な関係でのみ繋がっているわけでもない。おそらくは、大人が社会的文化的な存在であるがゆえに、文化的行為として大人は子どもの世話をし、また子どもをも文化的な存在とみなして関わろうとする。それにもかかわらず、最初は働き掛けへの応答が不明瞭で、従って容易に通じ合えたという実感を持つことができないという現実が待ち受けている。だからこそ、通じ合うことを希求し、それに端を発する関わりが生れるのである。

逆に、大人の働にき掛けに対して、乳児がタイミングよく機嫌のよい声を出したり、自閉症児が応答的に近づいてきたりすると、第三者にはそれが偶発的に生じたものと思われる場合でも、関与主体は直ちにそれを自分の働き掛けに対する「真の応答」と受け止める傾向にある。これも、そのような希求性が背後で働いているからである。そのとき、同時に「何かが通じた」というポジティブな情動が自分の内部で動き出して、次の働き掛けが自然に生み出されてくるのである。

このような働き掛け→応答の構図の中で情動交流的、情動共有的な関係が築かれていくその原初の場面こそ、コミュニケーションの成り立ちを考える出発点にすべきものではないだろうか。

このことは、コミュニケーションを情動交流的関係に解消してよいということの意味しない。いずれは言葉が登場してきて、言葉を媒介としたコミュニケーションが始まり、そこにおいて分節されたが観念が言葉という記号によって表現され、解読されるようになるのである。しかし、その場合でも、生きた二者間のリアルなコミュニケーションは、単なる観念や認知の交換ではなく、常に何らかの水準での情動交流的側面をもっているだろう。私たちが原初的なコミュニケーションを考察するに当たって情動交流的側面に焦点化するのには、それが記号伝達の側面に発生的に先行し、コミュニケーションそのものの基底部分を構成すると考えるからである。

これらの諸点を踏まえて、本稿では、いわゆるコミュニケーションが成り立つ一歩手前の、子ども一人関係の構造的特徴を、大人の側に焦点化しながらスケッチしてみたいと思う。

## 第1節 原初的（未分化な）

### コミュニケーション的関係の構造

#### (1) 「距離の近い」関係

通常の意味でコミュニケーションが成り立つ以前の、しかし後のコミュニケーション関係がそこから派生する

と思われる二者関係を、ここでは差し当たり原初的コミュニケーション関係と呼ぶことにしよう。それは、生れて間もない乳児と母親、あるいは言語的コミュニケーションが十分でない障害児とその関与者とのあいだに、一見したところ「働き掛け一応答」の相互的な関係が見られるような事態である。そのような関係の構造的な特徴の第一は、二者間の「距離の近さ」である。

Werner, H. & Kaplan, B (1963) は、言語がどのような母体から生まれ完成されていくかを「シンボルの形成過程」と捉え、それを「指示対象とシンボル体（記号）との、話し手と聞き手とのあいだの距離化＝d distancing」というふうに概念化している。彼らにとって、言語は、これらの各項が一体となった未分化な原初的母体からそれぞれの項が次第に分化し互いに「距離化」していく結果、現われ出てくるものに他ならない。従って、各項が未分化な原初の状態は、各項の「距離の近さ」を構造的にもつといえる。

この考えをコミュニケーションの成り立つ原初の場面に敷衍すれば、彼らの言うように、まずは伝え手と受け手の距離が近いこと（二者間の誰が伝え手であり誰が聞き手であるかも未分化であること）、および表現内容＝伝達内容と表現手段との「距離が近い」こと、つまり表現内容そのものと表現手段そのものが未分化で、かつまたその「あいだ」が未分化であること、等々と言ひ換えることができるだろう。しかし、コミュニケーションが成り立つ場面の構造特徴としての「距離の近さ」とは、物理的な次元だけの問題だろうか。

もちろん、二者がその場に居合せて、身体的に密接な「近い」関係を持つことは言うまでもない。しかし、ここでの「近い」という形容には、当該二者が身体的に密接な関係にあるばかりでなく、心理的にも密接な関係を日常的に持ち、従って互いに熟知していると同時に親密な間柄にあることが含意されている。原初的コミュニケーション関係は、よそよそしい響きを持つ「他者＝異者」と私のあいだに成り立つものではなく、「あなた」と私のあいだに成り立つものである。翻って言えば、乳児と母親という関係、あるいは障害児と関与者という関係がそのまま「距離の近い」関係なのではない。共現前するばかりでなく、お互いに相手が現前することを許容し、それを喜ぶという関係に立つこと、すなわち二者間に「あなた一私」という、互いに慣れ親しみ馴染み合った関係が成り立つこと、そのことこそ、ここに言う「近さ」の内実である。

例えば、自閉的な傾向を持つ子どもに最初に係わるときのとまどいは、物理的には至近距離にいるにもかかわらず

らず、「近い」という関係に入り得ないところに端を発している。関与者の意識に即して言えば、気詰りな、よそよそしい、自分がその子のそばにいることが許されていないという感じがそれである。しかし持続的な関与を通して馴染んだ関係が次第に積み重ねられていく中で、多くの場合はこの種のネガティブな「感じ」が地平化されてくる。そしてそのこと自体が「あいだが近くなった」というポジティブな感じに関与者にもたらして、原初的コミュニケーション関係に入る条件を整える結果になっていく。

乳児一母親の関係も同様である。母親にとって初めての子どもを手にしたとき、最初からその子の扱い方が分かるなどということはおよそありえない。どの母親にとっても、あまりにいたいけな我が子の様子に、最初はおっかなびっくりの関わりしかできないものである。ただ子どもの側が母親の世話を絶対的に必要としていることと、母親の内部において世話をすることへの暗黙の志向性が常に作動していること（それがなぜいつも作動し続けているのかは、解明を必要とする重要な問題である）とが条件になって、何はともあれ母親は無我夢中のうちに何らかの関与を行なってしまう、ということなのである。初期の母子関係には単なる共現前の関係を越える衝迫力があると言ひ換えてもよからう。それが母親の側から何らかの関与を引き出し、それが子どもから何らかの応答を引き出す結果になって（例えば、お湯に入れる→気持ちよさそうに伸びをする、あやす→にっこり笑うなど）、その働き掛け→応答の構図が母親には何かが通じたというポジティブな気分をもたらす。そのポジティブな気分は子どもにも浸透して、そのうちに共現前すること自体が互いにとって喜びになってくる。こうして初めて、母子は距離の近い関係になるのである。

このようなことは、健康な乳児と母親の「通常の」関係を念頭に置けば言わずもがなのことと思われるかもしれない。しかし、障害児と母親の関係や、障害児と担当教師の関係を考えてみれば分かるように、また、育児に傾倒できない母親と乳児の滞った関係を見れば分かるように、まずもって二者が心理的に近い関係に立てるかどうか、つまり、両者のあいだでポジティブな感情が動くかどうか、後のコミュニケーションの成り立ちに大きな意味を持つてくる。逆にそこから、母子の「通常の」関係に見られる心理的な近さは、母子という関係そのものに所与として与えられているものではなく、母親の子どもへの心的傾倒に基づく日常的な関わりと、子どものある水準での応答性（これも子どもの側からみれば単なる受動的応答ではなく、子ども自身による母親の

行為の意味づけ、世界の切り取りでもあるだろう)、の二つを条件として、通常の場合には最初の数カ月のうちに築きあげられていくものだということが示唆される。

私たちがコミュニケーション障害を子どものコミュニケーション能力の問題に還元することなく、むしろそれを子どもと大人の関係性(働き掛け→応答の行動的關係と、それに伴われる間主観的な水準での関係)の問題とみて、母親や担当教師など子どもに関与する側の子どもの受け止め方とそれに基づく関わり方の在り方を臨床の重要な柱の一つに据えるのは、そのためである。

## (2) 広義の情動通底：子どもの気持ちの間主観的把握

次に、原初的コミュニケーション関係においては、前項でみた「距離が近い」ということを条件として、二者間で広義の情動交流が可能になっている。「距離が近い」という条件、つまり関与する側が「間近に居合せて気持ちを相手へと向ける」という条件を満たす場合、子どもの気持ち(広義の情動)はおのずから通底してくるかのようになり、関与主体に間主観的に感じられてくる(この間の事情、および間主観的な情動把握という概念については鯨岡, 1986; 1989 a; 1989 bを参照されたい)。なぜそのようなことが可能になるかは難しい問題で、差し当たりは相手も自分も生きた身体的存在だからだとしか言い様がない(お互いが人間だからとは言わずに、生きた身体的存在だからと言うのは、広義の情動通底は可愛がっている動物と人間のあいだでも生じ得るからである)。生きた身体として共現前するという事は、そこにおのずから「働き掛け→応答」の構造が孕まれていること、さらには、生活体としての同型性を土台として、相手に脱自的に成り込む可能性が潜在的に与えられていることを意味する。

互いに赤ちゃんを連れた二人の母親が子どもの様子を見ながらくつろいでいるときに、「あら、〇〇ちゃん、眠っていつてるわよ」という言葉が一方の母親からその子の母親にかかるといった観察例を考えて見よう。別に赤ん坊が「眠い」と言ったわけではない。それは言葉をかけた方の母親が、間主観的に感じ取った子どもの気持ちを代弁したまでのことである。では、なぜその母親は子どものその様子を「眠たげである」あるいは「眠たい」と感じているのか。それについては、古くから、類比的推論だ自己投入(感情移入)だと、かまびすしい議論があった(Scheler, M., 1923; Husserl, E., 1931)。その議論はおくとして、いま必要なのは、そのような「近い」関係にあるときには、関与者においてその種の間主観的な広義の情動把握(うれしい、気分がいい、

安心している、眠い、機嫌が悪い、等々)が容易に可能になること(一方の情動=情感が他方に容易に通底すること)、またそのような把握がなされるときには、それを共有したり調整しようとしたりする意図が関与者の側に自然に生じること(Stern, D. N., 1985参照)、そしてそれがまた関与者の表情や声、体の動きや姿勢ににじみ出て、今度はそれが子どもに通底していくこと、これらを原初的人間の事実として認めることである。

5カ月頃の乳児のこぼれんばかりの微笑みは、見ている人を思わず微笑ませずにはおかない。また、悲痛な泣声は、聞く者の中に胸の締め付けられるような感じをもたらさずにはおかない。そのような快、喜び、不快、苦痛といった狭義の情動ばかりでなく、子どもの苛々した落ち着きのない態度に関わる大人をも苛々した気分にしてしまうように、「ゆったりした」「しっくりくる」「せかせかした」「いらいらした」のような広義の情動も含めて、その場に居合せた大人に子どもの気持ちや気分などの情動(情感)は容易に通底する。そのとき、それがポジティブなトーンを持っていればそれを共有しようという、またネガティブなトーンを持っていればそれを調整しようという試みが大人の側に自然に現われる。調整しようということは、結局子どもの気持ちを大人の願っている方向に持って行って、そこでポジティブな気持ちを共有しようということである(Stern, D. N., 同上)。従って、ここでの大人の関与は、いずれにしても子どもとポジティブな気持ちを共有しようという志向によって枠づけられていることになる。そのような関与に子どもの未分化な「応答」が絡むとき、大人の側には「何かを通じた」というポジティブな気持ちが動きだす。こうして、それらの「働き掛け→応答→働き掛け→応答……」の連鎖は次第にコミュニケーションの様相を帯びようになると、二者のあいだに沈殿していくことになるのである。

## (3) 子どもと関与者(養育者)の関係の非対称性=非対称性

私たちが主に子どもと大人(関与者)という二者関係において原初的コミュニケーション関係を考察しようと思うのは、次の理由による。すなわち、乳児の場合であれ障害児の場合であれ、コミュニケーションが成り立っていく生活過程において優勢な人間関係は、子どもと子どもの関係であるよりも、むしろ子どもと大人の関係であること、さらには、コミュニケーションの成立過程は常識的な意味で子どもが発達する過程でもあり、従ってそこには大人から子どもへの文化の引き移しという重要な契機が含まれていること、の二点である。

もちろん、子どもは生れたときから、大人＝関与者が思ったとおりに導くことのできるような受動的な存在ではない。泣き方、発声の仕方、体の動かし方、表情、欲求の表わし方、それらのどれをとっても、子どもは一人一人が個性的な存在であり、その意味において主体的である。しかし、子どもにそのような主体性を認めることと、存在のあり方としての対等性を認めることは同じではない。乳児であれ障害児であれ、子どもはいずれは大人へと成長変化していくことを宿命づけられている社会的文化的存在であり、子どもの独自性なるものも、養育の過程でそのものとしては尊重されながら、しかし子ども自らがそれを端的に乗り越えていくような独自性である。そしてその経験の量や質において、あるいは文化に巻き込まれているその度合いにおいて、子どもと大人とのあいだに歴然とした違いがあることは言うまでもない。

このような関係を大人＝養育者＝関与者の側から眺めれば、子どもとの関係は「いま、ここ」を充実させる志向（それは大人が文化的社会的存在であるがゆえに、必然的に文化を共有しようという暗黙の志向によって裏打ちされている）の下に営まれておりながら、しかし大人の側にはいつも既に暗黙の内にその「いま、ここ」を越えた未来の姿との関連で、いま現在の関与を方向づけていくような志向が働いているといえる。つまり、原初的コミュニケーション関係は、二者間の情動共有を端緒としながらも、そのままの姿にとどまることなく絶えずそれ自身を乗り越えていくような関係である。それは子どもの成長事実によるばかりでなく、大人の側が、子どもも大人と同じ文化を共有する存在であると暗黙のうちに見なして、大人から子どもへと文化を引き移していこうとするからでもある。それはまたさらに、二者関係に発する原初的コミュニケーションが、既にそれ自身の内にその二者関係を越え出て社会や文化に開かれていく契機を内包していることをも意味しているだろう。

子どもと大人のあいだの、文化を移入される者と移入する者とのこの非対等性は、コミュニケーション関係の非対称性をも意味する。通常大人同士のコミュニケーション関係では、伝え手と受け手は相互に役割を交代し得る対称的な関係にあるが、原初的コミュニケーション関係においては、そのような対称性は必ずしも存在しない。この関係を第三者的に見れば、いまだコミュニケーションとは言い難い子どもの表出や表現を、大人はあたかも子どもが伝え手であるかのように受け手として受取り、また、子どもがまだ大人の働き掛けを十分理解できないことを承知しておりながら、あたかも子どもが受け

手であるかのように、自らは伝え手として振る舞っているように見える。第三者的に見ればこのように「あたかも」という形容になるが、しかしそれは、大人の側が気持ちを持ちだして子どもに脱自的に成り込むことの結果である。原初的コミュニケーションには、このように関与者の内部での「自分の視点→子どもの側への成り込み」という往還運動が構造的に含まれている。このような大人の気持ちの持ち出しが原初的コミュニケーション関係を動かしていくのである（もちろんこのことは、その場で子どもがどのような様子を見せるかと切り離して考えることはできない）。

#### (4) 音声的な「やりとり」の重要性

それにしても、母親たちや関与者たちはなぜそのように傾倒的に関わるのか。それは、自ら社会文化的存在として自己形成してきた大人が、子どもを同じ文化を共有する存在とみなして「通じ合う」ことを当然のことのように希求するからである、と先に述べた。その希求性に端を発して情動共有や一体感が目指され、それによってこれまで述べてきた情動の間主観的把握を起点とする関与一応答の前コミュニケーション的關係が生じるのである。

しかしながら、当初「通じ合えない」ということの内容であった情動共有や一体感の欠如がある水準で満たされるようになって、それで母親や関与者が満足してそこに自足することはない。そのような情動的・一体感の確かに満足をもたらすものではあるけれども、それはあくまで目指されていること——子どもを同じ文化を共有する一人前の存在と認めて「やりとり」すること——の第一ステップであり、一時の「生の躍動＝elan vital」にすぎない。もしも通じ合うことの希求性が情動交流によって全て満たされるものなら、大人は関与の場で、子どもといわば「目と目で」やりとりできれば十分ということになって、黙したまま関わってもよいはずである。しかし実際にはそうならず、大人の働き掛けは決まって言葉掛けを伴い、子どもに音声的応答が現われると大人がそれを殊のほか喜ぶという事実がある。してみると、そのことは、「言葉＝音声」というものが人と通じ合うときに特権的な媒体となるということを示唆していないだろうか。

事実、健常母子の生後半年以降の関係をみると、情動共有的な関係を常に拠所としながらも、決してそこに自足せずに、母親は何か「言葉で」（あるいは非言語的音声を通して）やりとりしようと努力していることが伺える。音声的、言語的にも通じ合えることが安定的、持続

的な関係を保証すると言わんばかりで、比喩的に言い換えれば、点の繋りであった間身体的関係（一体感）を線で繋がれた安定した関係にするために、懸命に言葉でのやりとりを目指して努力しているのだとさえ見える。

そのことは例えば、子どもの気持ちが大人の側に間主観的に把握されたとき、殆どの場合、その把握されたものが言語化される形で言葉かけがなされ（「眠くなってきたね」「それが欲しいのね」）、またそれが行動的な関わり（寝かせる、物を取ってやる）に随伴する事実、あるいは、子どもの応答らしきものの中でも、特に音声的な「応答」が見られたときに、母親の満足がより大きくなって次の関与に熱が入るといった事実などに認めることができるだろう。社会文化的存在としての私たち大人は、また徹頭徹尾、言語的な存在でもあり、だからこそ子どもに言語的に働き掛け、また子どもにも言語的な（音声的な）水準での「やりとり」を求めていこうとするのである（3カ月児の機嫌のよい〔と間主観的に感じられる〕発声を母親が赤ちゃんの『おしゃべり』と受け止めて、『そう、お話し上手ね、もっとお話ししようか』と話し掛け、それに偶然タイミングがあう形で子どもが『アー、ウー』と声を発するとき、母親はあやせば微笑むという間身体的一体感に勝るとも劣らない満足を感じているように見える。それは、偶発的に生じた音声的「やりとり」が、母親の待ち望んでいる言語的コミュニケーションの様相に近かったからだろう）。

そのような観点からすれば、私たちは通じ合いへの希求性という考えに二つの側面を想定しなければならないことになる。一つは、間身体的に通じ合うという側面であり、いま一つは、言語的（音声的）に通じ合うという側面である。この二つの側面は生活体の相似的機能発現（analogous functionnig）として本来分ち難く結び付いているが、それでも、初期には前者が優勢で次第に後者の側面が際立ってくるという発達の変化がみられ、いずれは本格的な言語的コミュニケーションに席を譲るようになると思われることができる。

しかしながら、間身体的か言語的＝音声的かという違い以上に、通じ合いの希求性に二つの水準（中間段階を入れれば三つの水準）を区別しておくことが、初期の子ども＝大人の関係の理解には重要である。その第1の水準は、最初の半年に顕著に見られるように、子どもの発声に大人が言葉掛けのタイミングを合わせたり、あるいは子どもの動きに大人が自分の動きを合わせたり、要するに大人が子どもに合わせることによって、そこで両者がある種の満足（一体感）を感じるという水準（いわば第1次情動通底の水準）である。第2の水準は、最初の

誕生前後に顕著に見られるように、今度は母親が子どもに合わせるのではなく、母親の言語的働き掛けや身体的な働き掛けに子どもの方が応じるかのように、音声を発したり身体を動かしたりし、それがコミュニケーションの様相を醸し出す結果、両者が通じ合えた気分になる水準（いわば第2次情動通底の水準）である。

母親や関与者は、最初はこの第1の水準の通じ合いを求めて、基本的に子どもに合わせる関わりをする。そしてそれによって第1の水準が満たされるようになると、次には第2の水準での通じ合いを求めて、様々な働き掛けや誘い掛けを行なうようになる。当初それは大人が子どもの気持ちを間主観的に掴んで働き掛け、そこでの僅かな子どもの「応答」に大人が満足を覚えるという形をとる（中間段階）。そのうちに子どもの側に母親の気持ちを間主観的に掴む力が整ってくると（その成立機序は明らかでないが、おそらくは大人が子どもに成り込むことの鏡映として、子どもが大人に成り込めるようになるからだろう）、それらの大人の働き掛けや誘い掛けに対して、今度は子どもの側があたかも合わせるかのように、それに応じた声や身体の動きを示すようになる。その結果、大人の働き掛けと子どものそれへの「応答」は以前よりも高い水準でコミュニケーションの様相を醸し出し、第2の水準の通じ合いをもたらしようになるのである。

本稿で主に取り上げるのはこの第1の水準であるが、原初的コミュニケーション関係には、このような二重になった通じ合うことへの希求性が構造的にあつて、それが子ども＝大人の関係を駆動し、結局のところコミュニケーション的關係を整えていくのだという点を確認しておく必要がある。

このような子ども＝大人の関係の非対称性に照らせば、この原初的コミュニケーション関係の維持・展開の鍵を握っているのは、子どもであるよりむしろ大人であるとさえ言えるかもしれない（実際には、主体としての子どもの成長の度合いも、その鍵を握っている）。そこで、次節以降では、そのような原初的コミュニケーション関係において大人の果たしている役割に焦点を合わせてみよう。

## 第二節 原初的コミュニケーション関係における大人＝関与者の役割

- (1) 原初的コミュニケーション関係は大人＝関与者の間主観的把握を起点として始まる  
通常の意味でコミュニケーションというときには、先

ず子どもから要求や欲求が表出されそれを起点とする場合や、母親や関与者がある意図をもって子どもに働き掛けそれを起点とする場合など、何らかの「やりとり」の様相が念頭に置かれがちである。従来、母子相互作用ないし母子相互交渉という文脈で捉えられてきた母子間の行動的な相互作用関係は、その種のもと考えてよからう。

しかし、「何かが通じた」という関与主体の感じの部分を重要視しながら原初的コミュニケーション関係を記述していこうとすると、最初から実的な「やりとり」の関係から出発するわけにはいかない。前節でも触れたように、一見「やりとり」に見える、しかし実際にはいまだ真の「やりとり」ではない事態、それにもかかわらず、関与主体である大人の側がそれを「やりとり」と思い込んで（思い入れて）いくような事態こそ、原初の関係のあり様として記述の中心に据えられねばならないものである。

例えば、眠くて泣いている4カ月の乳児は眠いことを伝えようとして泣いているわけではない。それは単に今の自分の身体・心理的状态を表出しているのにすぎない。しかし、この泣きを聞いた母親が「そう、眠くなってきたの、じゃあネンネしようか」と語りかけていくとき、そこに原初的コミュニケーション関係が動き始める。一見したところ乳児が擬似コミュニケーション関係を起動させたかに見えるが、しかしこの場合の真の起動者は、第三者から見れば単なる泣きにすぎないものを乳児から自分への訴えと受け止めた母親である。

このように、子どもの側に自発的に生じてきた表情や声や身体の動きに子どもの気持ちを読み取って（間主観的に感じ取って）、それに応じるかのように働きかけていくというのは、初期の子ども一母親、障害児一関与者の基本的な、また重要な関与のあり方である。

既に述べたように、そこで間主観的に感じられたこと（先の例では「眠くなってきたこと」）は、養育者の意識にとっては乳児の主観の中で事実として起こっていることである。養育者は泣声を手掛かりにそのように解釈したのではなく、泣声に基づけられながらも、「眠い」という赤ちゃんの主観の状態がそのまま自分へと通底してきたと感じ取っている。だからこそ、「眠くなってきたね」と自然に言葉が掛けられ、寝かしつけていく関わりが生れる。しかしながら、その泣きを別の第三者は「泣いている」とだけしか受け止めないかもしれない。実際、物理的＝音声の特徴（例えば、その泣きがテープに録音された時の音声）が、そのものとして「眠たい」という意味を担っているわけでは必ずしもないのである。関与者

が自分の気持ちを子どもに向けて、子どもの気持ちを間主観的に捉えようとするか、それとも客観的に見るだけか、というこの態度の違いが、子どもの様子をどのように受け止めるかの違いになり、ひいては、次にどのように関わるかの違いに繋がっていくことになる。

障害児と関与者の場合も同様である。関与者が「苛々している」と間主観的に感じるところを、第三者はただ「動きが多い」と受け止めるだけかもしれない。しかしその受け止め方の違いが、「気持ちをなだめる」試みと「動きを制止すれ」試みとの違いになる。そしてこの違いが、関与者の関わりがコミュニケーション的に展開していくかどうかを左右しているように思われる。

この、事態が間主観的に受け止められるか客観的に見られるかの問題については、筆者はこれまで、脱自的に「感じる」態度と、「私」に定位した「見る」態度の違いとして言及してきた（鯨岡、1986aを参照のこと）。しかし、なぜそのような態度の違いがもたらされるのだろうか。

## (2) 間主観的把握と関与者の主体性

実のところ、子どもの気持ちが間主観的に感じ取られる背景には、養育者＝関与者の主体性の在り方が一枚噛んでいる。すなわち、各主体が暗黙のうちに取っている価値づけの枠組や願望・期待のあり方などが主体間で異なっているために、事態の受け止め方が異なってくるのである。その意味では、ここに言う主体性とは、従来の文脈で言い換えれば、関わりの個人差ということになる。ただ、個人差という用語が平均的なものからの誤差を含意しがちで、それを避けたいと、ここでは行動的関わりの違いよりも、関与者のその場での態度の違いや主観性の違いを問題にしたいために、あえて主体性という概念を用いようというまでである。

しかしながら、主体性という概念を持ち込むことによって、個々の関与主体の事態の受け止め方とそれに基づく関与のあり方の差異性が理解可能になるとはいえ、個々人の価値付けの枠組、従って主体性そのものが、既に文化という共同主観によって枠付けられ、そこに根を持っていることを見逃すわけにはいかない。その点で言えば、ここでの主体性という概念は、子どもを前にしたときの態度の差異性と、それを貫く文化共同性（共同主観性）とが二重に重ね合わされた概念として理解されねばならない。

主体性のあり方の相違によって、子どもの気持ちを間主観的に捉えられるかどうかの違いが出てくる、という点については、障害児に関わる保母と母親とで、ある場

面での子どもの受け止め方が異なってくる例を取り上げてみよう。例えば、保育担当者は、当初はどのように子どもに関わればいいのかわからず悩みましたが、最近は随分と一緒に遊べるようになってきたし、子どもの表情が生き生きしてきて一緒にいることが楽しいと感じられるようになってきたと、子どものことを肯定的に受け止めるように変わってきた。しかしながら母親は子どものそのような変化をなかなか認めることができないし、それを素直には喜べない。泥んこをしているときに互いに目があったときの子どもの嬉しそう顔。そのとき保育者は、そこにその子の「意欲」を感じ取り、その子の嬉しさを共有することができる。つまり、その子の気持ちを間主観的に掴むことができる。しかし、その子の母親には、泥だらけになった我が子の笑顔がなぜか無性に腹立たしく思われてしまう。

この例のように、関与主体によって子どもの様子の受け止め方が異なってくる場合があるが、その差異性を「いま・ここ」での二人の主体性の表われの違いとして理解しようというのがここでの狙いの一つである。しかしながら他方で、母親にそのように感じられてしまうというのも、母親の持つ価値の枠組が既に共同主観によって枠付けられ、就学を前にした子どもはもっといろいろなことができ、きちんとして「しっかりしている」はずだという「常識」が暗黙の内に働いてしまうからである。これに対して保母は、他の場面ではともかく、少なくとも「いま・ここ」では、その常識的な価値の枠組から自由になって、「自分の視点から見」から「子どもに成り込む」ことへの転回が可能になり、そうして泥んこを楽しむことができたということである。もちろん、彼女の場合も最初からそのように子どもの気持ちを掴めたわけではなく、その境地に達するまでには、常識的な価値の枠組を振り払い、自分へのこだわりから脱却するためのそれ相応の努力と態度変容があったに違いない。これに対して先の例の母親は、自らの(共同主観に枠付けられた)価値観から容易に脱却できず、それによって子どもに成り込むことができないままに、子どもから距離を置いて見る態度を取っているということなのである。

子どもに関与する大人は、社会・文化的存在として自己形成し、みずからの主体性の中心に共同主観性を宿している。「私」というこの主体は、常に唯一無二の私という私性において機能しているのではなく、むしろ通常は、共同主観に貫かれた無人称的かつ匿名的な「われわれ」の一人という資格の下に振る舞っている。それゆえ私たちは、場面を特定できれば、ある人がどのように振る舞うかを蓋然的に予測することもできるわけである。

しかし、主体を文字どおりに主体と呼び得るのは、自己が時と場合によっては自己の内部の共同主観性と対峙することができ、そこから脱却する可能性を常に内に秘めているからこそである。従って、主体性の発露は、時に常識＝共同主観性の線に添った価値付けを導く場合もあれば、時にそこから自由になって新たな価値の枠組を生み出す場合もあるだろう。保母と母親とで受け止め方が異なる事実を取り上げたのも、一方ではそれを二人の主体性のあり方の違い、つまり、脱自的に成り込む態度を取れるか、自分の視点を守る態度に終始するかの違いとして理解できること、他方では、その差異性そのものが共同主観性に貫かれていること、だからこそ私たち第三者にもその差異性のヴァリエーションの掘って来るところを了解できること、これらの点を指摘したかったからである。ただし、保母であれば、あるいは母親であれば、いつもこの例のような態度を取るかといえば、決してそうではない。障害児の母親の多くがそうであるように、いつの日か態度変容が生じて、「人並みでなければならぬ」という衝動から脱却し、「いまの姿のままでよい」という真の受容性が現われてきて、子どもとの関係を楽しめるようになってくる。他方、保母であっても健常児保育の枠組からなかなか抜けられない場合には、先の例のように子どもに成り込んでいくことができないだろう。

してみると、今の例からも示唆されるように、主体性という概念には、今一つ、時間軸のなかでの可変性という意味も込められていることになる。気質や性格という概念は、比較的安定した個人特性について言及するときには力をもつけけれども、価値観の変化や脱自的態度変容のように、個人の態度や主観性が時間軸のなかで変化することに言及しようというとき、これらの概念は不向きである。そのようなときには、当該個人という意味の主体 (subject) と、主観性 (subjectivity) の両方を同時に意味する主体性という概念が必要になってくると思われる。

ともあれ、今の文脈で確認しておきたいのは、関与する大人の価値の枠組＝主体性を背景に、子どもの様子がまずもってそのように受け止められること (子どもの嬉しい気持ちを感じ取れたり、「汚くて嫌だ」という自分自身の感情が意識されたりすること)、そのときそれに基づいた関わりがなされること (「泥んこ面白いね」という共感的な言葉掛けがなされたり、「そんな汚いことをして」という非難めいた制止や禁止の言葉掛けがなされること)、それがまた子どもから何らかの応答を引き出して、次の大人の関与を導くこと、さらには、その受け止め方

の相違に端を発する関わりとの相違が、二者間でコミュニケーション的關係が展開をみるかどうかを左右していること、以上の諸点である。

もちろん、これまで述べてきたのと同じ理由で、子どもの側にも主体性という概念が必要になってくる。子どもは氣質的、性格的な特徴を持っているばかりでなく、親や周囲の大人との関係の中で、ある水準での主観性を形作っている。従来、「基本的信頼」や「安心感」という言葉で語られてきたものは、これに相応するとみなしてもよい。子どもの主観性の内容をそのように安易に言語化してしまうことに抵抗感がないわけではないが、しかし、言語化するとすればそういうふうにするに言えないような、ある種の主観性を、子どもは特定の大人との関係のなか組み立てていることは確かである。子どもという存在は、単に、刺激に敏感であるとか、身体が脆弱であるという個人的特質をもった存在としてではなく、大人との関係の中で形づくったその種の「信頼感」や「安心感」をもつ主観的＝主体的存在として、いま大人の眼前に現前している。もちろん、それらの主観性は、関与者の子どもに対する優しい安定した気持ちが通底した間主観性でもあるが、しかしそれはまた、その都度の関係における子ども自身による世界の意味化、世界の切り取り方の沈殿した結果でもあるだろう。

ここではこれ以上この問題に切り込むことはできないが、いずれ子どもと大人の間に主観的、相互主観的な関係が精緻に記述される際には、それを避けて通れないことだけは指摘しておきたいと思う。

### (3) 関与者＝養育者の先取的対応

これまで私たちは、あたかも子どもを起点とするかのような、しかし実際には関与者の「読み取り」とそれに合わせる関わりにウエイトが置かれた関係を中心に原初的コミュニケーション関係を記述してきた。これはその関係の端緒の記述として欠かせない一面である。だが、遅かれ早かれ、その関係は明らかに関与者の先取的関わり——いわば関与者からの仕掛け——を起点にしても展開をみるようになってくる。つまり、関与者が子どもに何かをさせようと意図し、その意図が結局は子どもによって実現されるような展開である。子どもと関与者の関係はもっぱら関与者が子どもにつき従う「受容的」関係なのではなく、関与者の内部で暗黙のうちに作動している文化共有への志向（それが実際には関与者の願望や期待の形をとって表われる）が子どもに向けられ、結果的に大人から子どもへと文化が移し入れられていくような関係でもある。

乳児—母親の関係では、あやすと乳児が笑顔で応えて母子間に一体感が生れるようになる頃を境に、この種の「働き掛け—応答」の構図が顕著になってくる。もちろんその裏には、物への興味の増加、行動半径の拡がり、手指の巧緻性の増大といった、子どもの能力性の伸長があることは言うまでもない。ここではその時間経過を追った記述は省略せざるをえないけれども、特に最初の1年目の後半頃から誕生日前後に現われてくる一連の模倣的な音声的、運動的行動の出現とその定着化は、子どもの発声機能（言語機能）や運動機能の発達という文脈においてばかりでなく、そのような大人の関与を起点とした原初的コミュニケーション関係の深まりとその沈殿作用という枠組の中に位置付けて、読み解いていく必要があるように思われる。

例えば、「チョチチョチ、アワワ」と母親がやってみせるのを最初のうち子どもはじっと見て喜んでいるだけだった（9カ月）。しかし、母親には子どもにそれをさせたいという意図（この意図自体、母親の生きる文化に起源をもっていると同時に、その子の今の成長ぶりを土台にしたいわば「発達の最近接領域」への自然な働き掛けとして生れ出てくる）があつてか、「〇〇ちゃんも、チョチチョチしてごらん」と言いながら両手を打ち鳴らして誘うという関わりを何度も繰り返した。子どもの両手を母親が持って打ち鳴らさせたこともあった。そして11カ月のあるとき、母親がいつものように「〇〇ちゃんチョチチョチは？」と誘って、「チョチチョチ」と言いながら自分が両手を打ち鳴らしてみせると、その子はあたかもそれを模倣したかのように、両手を打ち鳴らして母親の方を見た。「〇〇ちゃん、チョチチョチできたね、上手ね、上手、上手」と笑顔で認める母親と目が会うと、その子は微笑んで再び両手を打ち鳴らしたのである。

次も一回目の誕生日前後の例であるが、母親は子どもの名前を読んで「ハイ」と応えてくれることを待ち望んでいたらしく、しきりに「△△君、ハイは？△△君、ハイ」と、母親自らが「誘う—応答する」というパターンを実行していた。もちろん、最初の場面で子どもがこれに応じて返事をすることはなかった。しかし次の週の観察場面で、母親が「△△君」と名前を呼ぶと、その子は「アーイ」と返事したのである。

これらの観察例に見られるように、関与者＝親の意図と行動が子どもに浸透し子どもによって実現されるようになる事実は、従来、言語模倣や行動模倣という文脈で取り上げられてきた。しかしこれは、今私たちがそうしているように、子どもと関与者間の誘う→応じるという原初的コミュニケーション関係の、より大きな文脈に置

き直して再検討される必要がある。その際、させようと思図したことを大人自身がまず取理的にやってしまう点に注目しよう。それは単純に手本を示すという働き掛けなのではない。むしろ「大人として誘い、自分が子どもに成り代わって応える」というふうなのである。従って、誘いかけ→問→応答というように、子どもが応えるまでの間をあいだに狭んだ「誘いかけ→応答」になり、その応答の仕方が、あたかも子どもが応答しているかのように、発声や行動が可愛らしく形取られている。母親自身が子どもに成り込んで応答しているわけで、その成り込んだ場所に、次第に子ども自身が入り込むようになり、今度は子どもが母親に成り込むようになったときに（母親の気持ちを間主観的に掴むようになった時に）、母親の望んだ応答が生れ出てくるのである。

筆者はこれまで、4カ月児の離乳食場面や6カ月児の這う場面を取り上げて、子どもの口を開かせたい、子どもを這わせたいという母親の願いや意図が、どのような母親＝養育者の先取りの関与を導くか、そしてその関与のもつ力動的様相がどのように子どもに浸透し、子どもを同型的な力動的状態に導いて、結局は母親＝養育者が意図し期待した行動を子どもから引き出す結果になるかを記述してきた（鯨岡, 1986b, 1989b）。この種先取りの関与と子どもによるその実現は、決して行動次元だけに現われてくることではない。母親が嬉しそうに微笑みかけると、子どもの側に特に嬉しくなるようなことがなくとも、子どもは母親のその表情を見るだけで、容易に嬉しそうに微笑む。これは既に情動通底として述べてきたことである。（鯨岡, 1988も参照されたい）。最初の一年目に現われてくる共鳴動作や模倣的行動は、発声機能や運動機能や姿勢制御機能がある水準に達していることを条件にしながらも、今述べた広義的情動通底と類似の原理で説明できるのではないだろうか。

もちろん、そのように言っても、4カ月の時点と6カ月の時点、さらには11カ月の時点では、子ども－母親の関係（システムと言ひ換えてもよう：Kaye, K., 1982参照）は微妙に異なっており、先取りの関与→力動性の通底→模倣的行動の現出という枠組だけで、それぞれの時点の関係＝システムを捉え切れるわけではない。今の11カ月児の観察例に関連して言えば、そのような模倣的行動が現われてる前に、子どもが母親＝関与者のすることをじっと見入るようになっていくという事実を指摘することができる。そのような関係のあり方は、4カ月、6カ月の時点では明確には見られなかったものである。先に述べた「子どもから母親への成り込み」というのも、まさにそのじっと見入る様子、あるいはその視線の中に、私

たちが間主観的に感じ取ったことに他ならない。それはまるで、じっと見ておきさえすれば母親のすることは何でもできるといわんばかりなのである。

なぜ最初の誕生日を間近にした子どもは、母親のすることをこれほどまでじっと見るのか。逆に、障害児と関与者の関係において、関与者の先取りの誘いかけや働き掛けがあるにもかかわらず、子どもがいまの11カ月の乳児ほどにじっと関与者に見入ることがほとんどないという事実をどのように考えればいだろうか。この二つの関連した問いに対して、それは健康な子どもに創発的に現われてきた力であるという簡単な答えを導いて満足するのではなく（Trevarthen, C. 1978参照）、健康な乳児に現われてくるその見入る行為と親のそれまでの関与のあり方との繋りを細かく見ていかねばならないだろう。ともあれ、子ども－関与者という二者関係の中で、子どもの側にそのようなじっと見入る行為が現われてくること、関与者の先取りの関わりが子どもの側に乗り移るかのようにして実現されてくる条件の一つだと思われるのである。

ここで、関与者が先取りの関わりを繰り返せば、それだけでその行為が子どもに乗り移るわけではないことに注意しよう。障害児の例を念頭に置くまでもなく、そこに子どもの側の潜在的な力の要素があること、さらにはその力のいわば熟度が問題になることは否定できない（4カ月時や6カ月時と11カ月時では明らかに「見る力」が違っている）。しかし、子どもの潜在的な力がそのまま行動になっていくのではない。「距離の近い」関係にある大人＝関与者は、まず子どもの気持ちを間主観的に感じとり、それに基づいて先取りの関わりが自然に生れ、それが子どもに浸透し、子どもの側に潜在していた未定型の力およびその熟度と微妙に絡み合って、子どもの下に形のある行動を仕立て上げていく結果になるのである。

Clark, R. A (1978) は「あげる－もらう」の場面に見られる子ども（1年目の後半）の要素的な身振り行動が、子どもに自然に現われてくる行動ではなく、人という種に備わった「手を伸ばす」「掴む」「落す」という行動が、母親の「あげる」「受け取る」という文化的身振りを見ることによって矯正された結果であるという、極めて興味深い観察を行なっている。さらにClarkは、そこに見られる母子間の働き掛け－応答の構造が、コミュニケーションの様相を持つことをも指摘している。その中でも特に興味深いのは、いまだ明確な応答が子どもに表われる前に、母親は「あたかも子どもに応答が表われたかのように」関わるという事実である（Clarkは、「ちょうだ

い」と要求しても物を手に持ったまま渡そうとしない子どもに対して、母親が「有り難う」と言いながら子どもの手にある物を取り上げて渡してもらった結果を作り出し、そのようにして「あげる—もらう」のやりとり関係を作り出していく例を挙げている)。

先に取り上げた私たちの観察例でも同様である。「○○ちゃん、チョチチョチは?」「チョチチョチね、チョチチョチ。」「△△君」、「ハーイ」。関与者が誘いかけ、そして関与者が自ら応答する。関与者=母親の一連の関わりは当初はこのように一人芝居の様相を呈している。子どもは差し当りは「見る人」であり「聞く人」である。それが、繰り返しの関わりの中で、関与者に現われていた行動が子どもの側に乗り移るとともに、「誘いかける→応答する」という構造を持つようになってくる。このような数多くの事実の下に、原初的コミュニケーションの構造が次第に成り立っていくのである。

### 結びにかえて

本稿では、コミュニケーションの成り立ちの基盤となる原初的な二者関係、つまり子ども—大人の共現前的な(「いま・ここ」の)関係を主に取り上げ、養育者=関与者の間主観的な情動把握を中心とした関与のあり方に焦点を合わせた。それは「コミュニケーションの成り立ち」というテーマのいわば横糸を提示する試みであったといえる。

しかしながら、子ども—関与者(養育者)という二者関係は、常に共現前的関係にあるわけではないし、その共現前的関係——先取的関与や情動通底——だけがその二者関係を動かしていくのではない。「いま・ここ」の二者関係は、発達という文脈においては常に「かつて・そこで」という二者関係の歴史を引きずっている。言い換えれば、「いま・ここ」の共現前的関係を駆動していくのは二者関係の「歴史」であるといってもよい。それぞれ主体である子どもと関与する大人が、どのような相互主体的関係を取り結びながら現在に至っているか、その関係の展開過程が関係発達の事実として明らかにされねばならない。その作業がいわば縦糸となり、それと本稿でその一端を示した原初的二者関係の構造記述の作業が横糸となって、この「コミュニケーションの成り立ち」というテーマが全体として織りあげられていくことになるのである。

そのような関係の展開過程の中で、それまでの関与する側にウエイトの置かれた関わり合いが変化し、一見したところ対等な関係と思われる事態がいずれ現われてく

る。乳児でいえば、最初の誕生日前後にこうしようという意図が非常にはっきりしてきて、関与する大人がそれに従わざるを得なくなるような事態が現われる。すなわち、それまでの「おなかが減った」「眠くなつた」というような、自分の内的状態に発する欲求表出とは一線を画した、「これが欲しい」「ボクも食べたい」「膝の上に座らして」と言語化できるような、明らかに子ども自身の意図と感じられるものが現出してくる。そのとき、それまでのように、母親が子どもの気持ちを読み取って関わることから、母親が子どものいわば文化化された意図に従わざるをえないと感じて関わることへと、大きく事態は展開する。それはまた、子どものもとに「自我」が感じ取られる事態でもあるだろうし、また言葉の誕生の間近いことが予感される事態でもあるだろう。

障害児と関与者の関係でも同様である。日常的な生活を通して二者の関係が深まりをみせていく中で、当初、大人が子どもの気持ちに添っていくことが支配的であった関係は、子どもの明確な意図と大人の意図がぶつかって、その時々でどちらかが相手に合わせていくような関係へと展開する。

ここでは、このような変化が現われてくるまでの前駆的段階における「いま・ここ」の関係の構造が示されたにすぎない。子どもに明確な意図が現われ、「対等な」様相の下に本格的なコミュニケーション関係が始まる事態については、稿を改めて論じてみたい。

\*\*\*

なお、本稿で述べた原初的コミュニケーション関係の構造を、通常の記号伝達・解読モデルと対比させる形で図示しておくことにしよう(これは平成元年度、文部省科学研究費補助金による重点領域研究の、その成果発表報告集に掲載されたものに一部修正を加えたものである:鯨岡, 1990参照)。

図1は、通常の記号伝達・解読モデルである。これに対して図2の上半分は、原初的コミュニケーション関係の「いま・ここ」の機能的構造を示し、下半分は、かつての「いま・ここ」の関係が生活の中で沈殿することによってそれぞれの主観性が形成され、それが相互主観的関係として「いま・ここ」のコミュニケーション的関係を目に見えない形で制約している事情を示したものである。本稿で主に取り上げたのは、主として図2の上半分であり、第2節第2項の主体性の概念について言及したところは、図2の下半分に一部分対応する。

この原初的コミュニケーション・モデルの第1の特徴は、コミュニケーションを何らかの水準で「通じ合う」ことを基盤にした相互主体的な二者関係として捉え、記

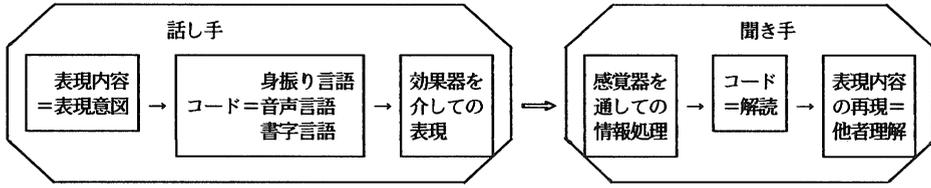


図1. 健常者に想定されている記号伝達モデルまたは情報処理モデル

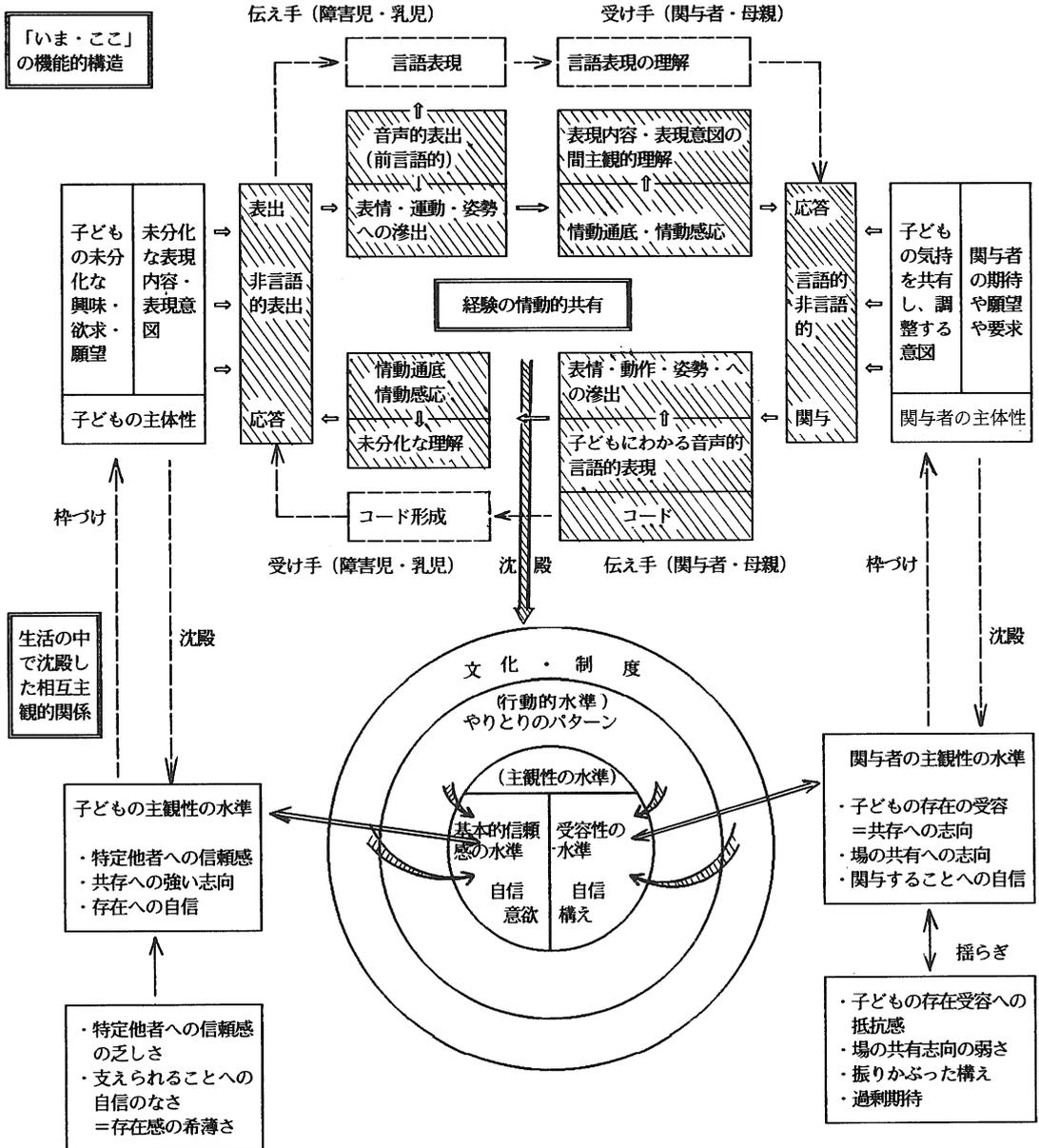


図2. 原初的コミュニケーション構造

号の伝達・解読をその関係の表層構造と見なしていることである。ここに表層構造とは、図2の外周部のことである。視点を変えれば、図1のような記号伝達・解読モデルは、この図2のモデルから二者間の情動交流的側面を捨象することによって成り立っていると見ることができる。図1は、一般的かつ普遍的なコミュニケーション構造を抽象化して簡潔に示す利点があるが、情動交流を含むリアルな二者間コミュニケーションそのものをモデル化したものではないのである。

そのこととも関連するが、特徴の第2は、原初的コミュニケーション関係の中心に子どもの気持ちの間主観的把握(情動通底)を置いていることである。図2の中心部は、本文でのべたように、まず大人の側が子どもの情動を間主観的に感じ取ることから、情動ループが巡り始めることを図示している。子どもの側について言えば、その表現内容も表現意図も客観的には未分節であるが、しかし表情や動きや発声の力動的様相が大人に浸透する結果、大人に間主観的な情動把握がもたらされる。それが「情動通底・情動感応」と書いた部分である(これは恐らく子どもの側にも想定し得るだろう)。大人はその力動的な情動把握を子どもの表現内容や表現意図として子どもの側に指し示し、それに「応じる」かたちで、つまり子どもの気持ちを共有したり調整したりするかたちで関与的な活動を行っていく。その共有や調整の意図は大人の表情や動きや声の力動性となってにじみ出、その力動性が子どもに通底して、子どもに未分化な応答を引き出す。しかしそれは子どもの側の意味の切り取りという能動性をも意味し、従って、「応答」はそのまま「表現」ともなって、再び大人がそれに応じることに繋っていく。そのような働き掛け→応答のループの積み重ねが、あるとき以来、子どもの母親への成り込みと母親の気持ちの間主観的把握をもたらすようになり、その働き掛け→応答の様相が次第に相互性を帯びるようになってくる。このように情動の水準をベースにコミュニケーション的なループが巡る様子を、原初的コミュニケーションの端緒と見なそうというのが本稿の趣旨である。

特徴の第3は、本文でも触れたように、この関係を相互主体的なものとして概念化し、特に関与者側の主体性の在り方をこのコミュニケーション的関係の展開の鍵を握る重要な要因として掲げていることである。

以上がこの図2における「いま・ここ」の機能的構造の特徴であるが、しかし、「いま・ここ」において示されるその人となりとしての主体性や行動は、時間経過の中で(二者関係の積み重ねや発達時間の経過の中で)形づくられてきた面をもっている。そのような主体の歴史と

二者関係の歴史が、その「いま・ここ」の関係のあり様を背後で規定し枠付けている。その点で言えば、図2の上半分は、その背景的、基盤的な構造を掬いあげるにまで至っていない。そこで図2の下半分が考えられねばならないが、そこでは、その各自の歴史を引きずった主体のあり様が(主体性が)どのような主観性を構成しているか、またそれがどのような間主観的かつ相互主観的な関係に基づいているかが問題となる。従来、「受容性」とか「信頼感」などと言われてきたものは、この相互主観的な関係の一部分に相当すると思われる。しかし、これについては差し当たりは簡単なスケッチを示すことしかできない。これも先に述べた「縦糸」を示す試みとともに、筆者に残された今後の課題である。

追記：本稿は「教育と医学」(1990年6月号)に掲載予定の「コミュニケーションの成り立ち」という小論を土台にして、それに大幅な加筆と修正を加えたものである。

## 参考文献

1. Clark, R. A. (1978). The transition from action to gesture. Lock, A. (ed.) "Action, Gesture and Symbol", Academic Press. (鯨岡 峻編著, 鯨岡和子訳『母と子のあいだ』ミネルヴァ書房, 1989年 1-35.)
2. Kaye, K. (1982). "The Mental and Social Life of Babies". The University of Chicago Press.
3. Husserl, E. (1931). "Cartesian Meditation" 船橋弘訳『デカルト的省察』世界の名著, 第51巻 173-353. 中央公論社 1970年
4. 鯨岡 峻 (1986 a). 『心理の現象学』 世界書院
3. 鯨岡 峻 (1986 b). 母子関係と間主観性の問題「心理学評論」Vol. 29, No. 4, 506-529.
4. 鯨岡 峻 (1988). 愛着するということ「教育と医学」第36巻第2号 23-29. 慶応通信
5. 鯨岡 峻 (1989 a). コミュニケーション障害の構造と指導 1 昭和63年度文部省科学研究費補助金重点領域研究「コミュニケーション障害児の診断と教育に関する研究」成果発表論文集 33-34.
6. 鯨岡 峻 (1989 b) 初期コミュニケーション研究の一つの視座 「発達」No. 39; Vol. 10 86-94. ミネルヴァ書房
7. 鯨岡 峻 (1989 c) 初期母子関における間主観性の領域(鯨岡 峻 編著鯨岡和子訳『母と子のあいだ』ミネルヴァ書房 第11章 277-312.)

8. 鯨岡 峻(1990). コミュニケーション障害の構造と指導 2 平成元年度文部省科学研究費補助金重点領域研究「コミュニケーション障害児の診断と教育に関する研究」成果発表論文集 49-52.
9. Scheler, M. (1923). "Wesen und Formen der Sympathie". 青木 茂・小林 茂訳『同情の本質と諸形式』シェーラー著作集 8 1977年 白水社
10. Stern, D. N. (1985) "The Interpersonal World of the Infant". Basic Books.
11. Trevarthen, C. & Hubley, p. (1978). Secondary intersubjectivity. Lock, A. (ed.) "Action, Gesture and Symbol", Academic Press. (鯨岡 峻編著, 鯨岡和子訳『母と子のあいだ』ミネルヴァ書房, 1989年 102-162.)
12. Werner, H. & Kaplan, B. (1963). "Symbol Formation", Wiley. (鯨岡 峻・浜田寿美男訳『シンボルの形成』1974年 ミネルヴァ書房).